

じんけん

JINKEN
第148号
(通巻 275号)
2022年12月1日発行

INDEX

特集

第44回大分県人権・部落差別解消教育研究大会ならびに第7回大分県人権・部落差別解消保育研究集会
ヒューライツフォーラム2022を終えて 2

第2回部落問題学習実践講座 4
県教委制作DVD「そなん、こだわるほうがおかしい」で
授業や研修をやってみよう！

第12回九州地区進路保障実践交流学習会 6
「負けられません、あの会社に入って会社を変えたいです」

第39回九州地区部落解放史研究集会 7
九州地区部落解放史研究集会から学んだこと

「子どもアドボカシー」って何だろう？ 8

こどものまなざし 9
自分の経験を通して思うこと 中津市 K・Yさん

問題行動の対応のみで終わらない子ども理解をめざして② 10
わたしもクラスのなかまなの…？

ねがい 12
大分県人教 会長 後藤 哲郎



公益社団法人

大分県人権・部落差別解消教育研究協議会

大分県大分市大字下郡496-38 大分県教育会館内
TEL: 097-556-1012 FAX: 097-556-0864

URL <http://kjkkoita.jp>
E-mail hello@kjkkoita.jp



大分県人教の
ホームページは
こちら

印刷 小野高速印刷(株)

第44回大分県人権・部落差別解消教育研究大会ならびに
第7回大分県人権・部落差別解消保育研究集会

ヒューライツフォーラム2022を終えて

10月21日（金）・22日（土）の2日間、杵築市文化体育館をメイン会場として、杵築市内の14施設15会場を設けたヒューライツフォーラム2022（以下HF2022）が開催されました。



感染症拡大の波が何度も訪れる中、地元実行委員会の献身的な取り組みによって無事に現地開催することができた本大会は、密を避けることを大前提に計画されてきました。準備会議の現地開催もままならない時期にはオンライン会議で共通理解を図ったり、参加者が乗り合わせで密にならないように駐車場の確保を最優先としたり、感染症の波が開催日に来ても延期としないで進められるように全体会の参加者を絞ってのハイブリッド開催（現地＋動画配信）としたり、今までとはかなり異なる流れでの開催準備となりました。

記念講演は、大阪から仲岡しゅんさんに来ていただき、「LGBTとジェンダー・セクシュアリティを巡る人権課題」という演題でお話しいただきました。以下、参加者感想を紹介します。

- ・小学1年生の担任をしています。仲岡さんの折り紙の話、本当に分かりやすかったです。仲岡さんみたいにうまく伝えられるか分かりませんが、「いろんな人がいるんだ」ということを授業で伝えていきたいです。
- ・「互いを認め合う」ということは、頭では分かっているけど、突然その場面に出くわすと、どう反応するか分からない。今日のような学習の中で、「当たり前」のこのように認識し、認め合えるようになりたい。
- ・自分の中で「多様性」という言葉が先行し、考えはまだまだ固いことを実感しました。

また、人権のまちづくり分科会（第15分科会）では、杵築市人権啓発・部落差別解消推進課ならびに杵築市隣保館のみなさんのご協力により、浅黄半襟懸け拒否逃散一揆から部落差別解消を学ぶことを目的として、現地フィールドワークを開催することができました。以下、参加者感想を紹介します。

- ・身近な人や自分自身に差別が起こったらどう考えるのか。遠い昔の知らない方の身に起きたこととして終わらせないことが大切だと思いました。
- ・「逃散する人々の思いや心情」に寄りそった講師のお話は心に深く入ってきました。当時の差別されてきた人々の「差別は絶対に許さない」という思いを、険しい山道と重ね合わせながら、体感・共感・想像することができました。

今回のHF2022の参加者は、998人（招待参加者含む）となりました。県人教会員だけでなく多くのみなさんが参加してくださり、予定数よりも大幅に参加者が増えた大会となりました。お忙しい中にもかかわらず、県内各地よりのご参加ありがとうございました。部落差別をはじめとするあらゆる差別を解消していくための教育の大切さを、参加者全員で考え実感していくことができたのではないのでしょうか。

次年度のHF2023は中津市での開催です。各地区から報告される実践報告を柱として、より多くの方がつながれる学びの場づくりを進めていきたいと思います。

分科会によせられた感想の紹介（一部抜粋）

- ・ひとりの子どもに焦点を当て経過を聞くと、その子自身だけでなく、保護者とも向き合って関わっていく支援の大切さ、見取るということの大切さを改めて学ぶことができました。1年を通しての変化を聞くと、その場だけでなく、継続した支援を意識したいと思いました。
- ・実践報告や質疑のやり取りから、多くの方々が人権問題に情熱を持って取り組まれていることを改めて認識しました。自分自身はまだまだ不勉強ですが、すべての人権問題を自分事として捉え、分からないことは素直に分からないと言い、教えをいただきながら学び続けたいと思いました。
- ・困りを意見表示することは自分の命を守ることに繋がることから、先のことも見すえた「手をはなす支援」のあり方が心に残りました。また、人間関係づくりプログラムについて、本音を言い合える「人間関係」を築ける域まで高めていくには、今後どのようにしていけば良いのかを考える時間にもなりました。
- ・学習会の大切さを改めて共感できました。若いとき、その地区の学習会に参加させてもらい、生の声を聴かせてもらうことができました。地元に戻った今も、その声が生きています。みなさんにもいろいろな事情があることと思いますが、子どものために頑張ってもらいたいと思うし、私も一緒に頑張りたいです。
- ・外国にルーツをもつ子どもたちはますます増えるだろう。10年前に比べ、声を上げた方のおかげで制度も整ってきている。発達に困りをもつ子どもが困りを言える（表出できる）ように、心の中に不安があることを理解して向き合っていきたい。支援者の支援も必要だ。
- ・「言葉」の大切さを改めて考え直すきっかけになった。否定する言葉の裏を見つめる力…悲しさを聴く力…。それは教職員の繋がりにも言え、つぶやきが言える自分、それを聴ける自分がいるか確かめる時間となった。小グループで話す時間もあり、若い教職員なかまの実態も聴くことができた。今日のように顔を合わせて話し合える機会を大切にしていきたい。
- ・公民館や社会教育課で行っている社会人権教育と、学校で行っている人権教育の連携は、まだまだ伸びしろがあると感じた。行政職員、公民館職員と教職員とで、もっと協議したりすり合わせたりすることが大切だと思った。
- ・報告者として初めて参加して、フロアの方の真剣で鋭い質問やご意見にたじろぎながらも、貴重な経験をさせて頂き感謝しています。今回私は外国にルーツをもつ子どもの問題について発表しましたが、どんな人権の諸課題にとりくむにしても、大切なのは現場の教職員の一人として、目の前の子どもに向き合い、自分を見つめ直すことだと痛感しています。ヒューライツフォーラムは、様々な立場で教育に関わる人たちが、同じ土俵で語り合える場だと再認識しました。これから思いを分かち合い、実践に繋げていけたらと思います。ありがとうございました。
- ・レポート報告を元に、会場参加者の本音が言い合えて良かったです。誰しも悩みを抱え、どうにかしたいと思っても、話したり、繋がったりする機会も、感染症対策だけでなく、学校の多忙さにかき消されてしまいます。今日はとても新鮮な気持ちで参加できました。これまでヒューライツフォーラムに何度か参加しましたが一番楽しく参加できました。現場で、「次はこうやってみよう」と思える自分自身のコントロールもすごく大切だと改めて思いました。

参加者（資料購入者）に対しての、「全体会録画配信」は2023年1月31日（火）まで続いています。資料に記載されたパスワードを打ち込んでご覧ください。

特に、前述の感想の中にも紹介されています仲岡しゅんさんの「折り紙の実践」は、動画の2時間18分の辺りからですので、是非ご覧ください。



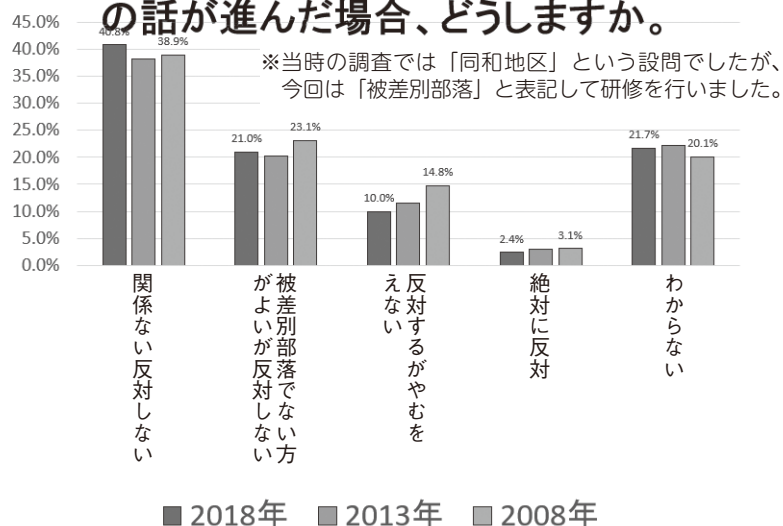
第2回部落問題学習実践講座

県教委制作DVD「そなん、こだわるほうがおかしい」で授業や研修をやってみよう！

10月13日（木）に第2回部落問題学習実践講座を開催しました。今回は結婚差別をテーマにした部落問題学習を企画しました。参加者は46名（うち、オンライン参加の方は28人）でした。教材として県教委が制作したDVD「そなん、こだわるほうがおかしい」（本編24分、日本語字幕付き）を扱いました。これは県教委が2020年9月に発刊した『おおいたの部落問題学習 高校編』の中にある教材を2022年3月にDVD化し、県内の全高校に無償配布したものです。この教材は、県内の元教員夫婦の実話が基となっており、由布市で収録し、大分弁でストーリーが展開していきます。

資料1

質問（大分県の意識調査資料） 家族の一人が、被差別部落の人との間に結婚 の話が進んだ場合、どうしますか。



講座では、県人教事務局から「結婚差別を部落問題学習で扱うにあたり」として、導入で使える資料として、結婚披露宴の場面のイラスト、日本国憲法第24条「両性の合意」、更には大分県内の「人権に関する県民意識調査」結果（資料1参照）などがあることを紹介しました。

次に、このDVDの背景について説明しました。ストーリーは結婚を控えた2人とその親たちがどう変容していくかを描いています。しかし、実際は、主人公の部落問題との出会いや、彼女の部落出身というカミングアウトがあり、親の考え方を知る場面での主人公自身の差別性もありました。そうした

ことを理解した上で、授業者、生徒たちが自分自身や自分の家族がこの状況だったら、どうなのかを思い巡らして学習することが重要であると確認していただきました。

DVD鑑賞後、授業展開について指導案例を示しながら思いを述べました。「何のための人権学習なのか」については、かつて、ある県内の高校で「人権学習をするのはお前がおるけん？」と部落出身生徒の机に落書きがされた事件から学んだこととして

- ・人権教育とは、「差別される可哀そうな人のための学習」ではない
- ・人権教育とは、自分の心の中を見つめ、自分の中にもある差別する心に気づき、乗り越えようとする作業をすること。だから誰にとっても大切な学習である

と整理した上で

「善悪」で考えていたことが、いざ自分事になると「損得」という判断基準にすり替わってしまう弱さを持つ私たちであること。
「差別は悪い」と言いながら、いざ自分事になった時に差別する側に回ってしまう。

という傾向に成りがちなことを押さえました。子どもたちにはワークシート（資料2参照）を記入させ、自身の生き方や部落差別とどう向き合っていくのか考えさせ、授業者自身の反差別の思いを述べて、授業のまとめをしてほしいと提案しました。

資料2

人権学習ワークシート

DVD「そんなん、こだわるほうがおかしい」を見て

1. 「部落の人と結婚さえしなかったら、こんな思いをせんですむ」「お前があんまりおかしいことを言うんなら縁を切ってもいい」と言う父親に、アツオは「父さんにも母さんにもこれまで育ててもらった恩は十分感じちょん。父さんが縁を切ると言っても俺からは絶対にそんなことはせん。俺はヒカリのことを分かってもらえるまでずっとこの家にいる。2人もヒカリに会えば分かるはずや。」と言いました。アツオとヒカリの友だちであるあなたは、アツオの父親と母親にどんなことを伝えたいですか。あなたの言葉で、アツオの父親と母親に話しかけてください。

あなた：

2. DVDを見て、これからあなたは部落差別とどのように向き合っていきたいと考えましたか。あなたの思いを書いてください。

誌面の都合上抜粋になりますが、参加者の感想をいくつか紹介します。

- ・DVDの最後に、「スタートライン」とありました。確かに「立場宣言」もしかり、これから始まる種々の課題をどのように乗り越えていくかが大事になっていくと思います。
- ・1時間扱いではきびしい。教えるのではなく、子どもが意見交換をする中で気づき、怒り、希望を持つような授業をめざしたいですね。
- ・実話なので説得力のあるDVDでした。ただ実際はもっとつらい現状だったと思います。部落に対する差別、偏見、思い込みがとにかく暗いイメージになりがちですが、仲間と共に明るい未来を築いていく希望を子どもたちにはもって欲しいです。
- ・人権授業に、どきどき苦しい思いをするかもしれない子どもの存在を思うことで、授業内容の検討はまったく違うものになると思います。授業の確認やプレゼン資料の整理も大事ですが、生徒にどんな思いを伝えるか、どんな思いを引き出したいかを軸に、授業を考えていくことが、人権教育には求められていくのだと思います。
- ・小学校勤務の自分にとっては、少し遠い話なのかと思っていました。（すみません）
でも、偏見や子どもたちとどう向き合うか、全く同じでした。今後、本校の子どもたちが、「自分事」として人権学習に取り組めるようしっかり参考にがんばっていきます。
- ・このDVDを見ながら自分の身内の結婚差別を思い出しました。（主人公の）おじさんの様な立場の人はいなかったですが、2人を見守り、はげましてくれる仲間の存在がありました。子どもたちにそんな存在になれる様な教育をしてほしいと思います。

「負けられません、あの会社に入って会社を変えたいです」

九同教第12回九州地区進路保障実践交流学習会が鹿児島市で行われました。九州地区における実践報告をもとに研究協議を進め、各地・各校の進路保障の内実を、より確かなものにしていくことを目的に、この学習会が毎年開催されています。今年は、鹿児島から「地区の子どもたちが学ぶ『学習会』の取り組みとそこに関わる教員の学びの報告」、熊本から「自身の生き方と重ね合わせながら生き方として人権教育・進路保障と向き合っている報告」がありました。

討議の中で、ひどい就職差別の現実に出会った子どもが、学校と共に取り組み、「負けられません、あの会社に入って会社を変えたいです」とその会社に入社し、結果として、その会社の中で人権学習が始まり、反対方向を向いていた社長を変えていったことが示されました。大分からもこれらの話を受けてたくさんの「思い」や実践を返し、全国高等学校統一用紙の取り組みは「言えない人」「書けない人」のためではなく、自分自身のための取り組みであることを確認していきましました。

今回、参加していただいた大分国際情報高校の荒木大介さんに感想をいただきました。

九同教 第12回九州地区進路保障実践交流学習会に参加して

大分国際情報高等学校 荒木 大介

今回、人権教育において特に進路保障に向けた実践を学習することができるということで、高校現場で進路指導にも携わっていることもあり、有難く参加させていただきました。実践交流学習会を通して感じたことを報告させていただきます。

1点目は、学習会に参加している子どもや参加していない子どもに関わらず、子どもとの信頼関係が最も重要であることでした。自分自身分かっていづつもりだったのですが、報告を聞き再認識させられました。2点目は、子どもたちに関する様々な情報を共有することの大切さです。報告の中でもありましたが、子どもたちとの何げない会話や遊びの中で聞こえてくる呟きなども一つひとつ丁寧にキャッチする。そしてそれらを日常的に学年集団等で共有することにより、子どもたちを多方面からサポートできることになります。情報によっては、子どもたちを褒めることもあります。1人の教員からではなく、複数の教員から褒められたらきっと嬉しいと思います。これら2つの点から、私たち教員は、目の前の子どもたちに向き合うこと、つまり子どもたちの実生活、背景、保護者の想いを知ることがスタートになるのかもしれないと思いました。

また、進路保障においては、現在使用されている全国高等学校統一用紙が出来るまでの取り組みや今後の課題があります。進学や就職の受験に際して、多くの違反質問等が存在します。これらの不当性に気づき、何が問題であるかを教員と子どもたちとで共に理解しなければなりません。当たり前だと思っていた事の中にも差別がある場合があります。日々の生活の中で、気づき、考え、学び、行動したいです。

交流会の中で、印象的な言葉がありました。「学び続けることは問い続けること」、「誰かのためだけに行動するのではなく、差別に加担しない自分の生き方のために行動する」、「同和教育は人を変える教育ではなく、自分を変える教育である」。

今回の実践交流学習会に参加して、各県から参加されている皆さんの熱い思いも感じることができました。子どもたちが不当な対応をされて傷つくことが無いように、これまでの年月の中で、様々な努力がなされ、その結果多くの改善がなされてきたことを知りました。

最後に、参加後、私自身、自校の生徒たちの見方が少し変わったのを実感しています。



九州地区部落解放史研究集会から学んだこと

7月28日～29日に第39回九州地区部落解放史研究集会が大分県教育会館で開催されました。コロナ禍のため3年ぶりの集会です。7月前半から再び、第7波の新型コロナウイルス感染拡大の傾向が見られるようになり、対面研修だけでなく、オンライン研修も併催することとなりました。県内からは現地参加22名、オンライン23名、県外からの対面研修参加は33名でした。

【報告1】「感染症と部落問題－近代都市のコレラ体験－」 関儀久さん（福岡県人権研究所）

コロナ禍で感染症の原因を病者の行動歴等に求める社会が歴史的に形成される過程と、今なお私たちの目の前に部落問題が存在することには深い繋がりがあるという立場で関さんは報告しました。明治期のコレラ体験資料（『福岡市誌』『福岡日日新聞』『第3回九州医学会報告』等）によると、当時の識者は偏見に満ちた捉え方で「新平民」の村とコレラの関係を導いています。これらの記事を読むと、全国水平社も立ち上がっておらず、ましてや、部落問題学習などあるはずもなく、被差別部落に対する偏見や差別意識を民衆が空気のように吸い込み、受け入れられたことがわかり、科学的根拠に基づく教育の大切さを実感しました。

【報告2】「戦後高度経済成長と同和対策事業」 花田昌宣さん（熊本県部落解放研究会）

花田さんは部落史研究の課題として、①1950年代から始まる日本の高度経済成長期に部落問題はいかなる変容を遂げたかが基本的問題 ②戦後部落解放運動史は研究・調査の対象としては定置されていない ③だからこそ、九州各県から戦後の被差別部落の実情、同和対策事業史、施策史とその実情を持ち寄り、部落解放の課程を明らかにしようと提起しました。

【研究討議1】授業実践「命令にしたがわなかった対馬の人々」

長瀬陽一さん（長崎県人権教育研究協議会）

この集会の主催である九州地区部落解放史研究連絡協議会では、「部落史研究の成果をどのように教育現場に活かしていくか」もテーマにしており、今回も学校現場からの授業実践が報告されました。小学校6年生を対象にした読み物教材です。「朝鮮との貿易がさかんな対馬藩において徐々に貿易が不振になり、財政を立て直す為に、藩の政策として島外から被差別民を移住させ、牛の皮を使った履き物をつくらせ、貿易振興をはかりました。1度目は被差別民と対馬の人たちと交流がすすんでしまい、幕府の命令で追い返す結果になりました。しかし、財政上の理由から対馬藩は再び被差別民を島外から移住させ、前回より厳しいお触れを出していき、対馬の人たちも段々と差別する側になってしまった」という史実に基づいた教材です。

この授業のねらいは「差別がつくられていくおかしさや偏見や噂話を鵜呑みにしない態度の大切さに気づく」こととしており、子どもたちに対して「対馬の人々が、最初は藩のお触れを守らずに交流したのは、なぜか」、「結果的には差別をするようになってしまった、なぜか」を問うていました。「自分の気持ちを伝える力」「違いを認め合える力」「差別を見抜く力」等を身につける授業実践でした。

【研究討議2】資料解説「対馬の近世史料を読む 一対馬に召致された被差別民をめぐって」

橋口和孝さん（長崎人権研究所）

橋口さんの報告は、長瀬さんの授業実践の資料となる当時の対馬藩の統計資料や古文書の解説についての発表でした。

この集会は、他県との部落解放史に関わる情報交換、実践交流の場です。部落史の掘り起こしの意義とそれをいかに現代の視点から部落差別解消・人権確立につなげるかを考えさせられた集会でした。

「子どもアドボカシー」って何だろう？

1. 大分県における子どもアドボカシーの取り組みについて

大分県では、2020年3月に「大分県社会的養育推進計画」で提言された「子どもの意見を聴く機会の確保など必要な仕組み」を準備検討することや、児童虐待防止対策の強化に向けた子どもの権利擁護の推進といった国の動向などを踏まえ、「子どもの権利擁護にかかわる実証モデル事業」を実施することになりました。

具体的には、子どもの権利の中でも、特に大切な4つの権利（生きる権利・守られる権利・参加する権利・育つ権利）の「参加する権利」の自由に意見を言える意見表明権を子どもの声をマイクとして伝えていくアドボカシー制度を、大分で取り組むこととなり、養成講座を受けたメンバーがアドボケイトとして活動しています。

※「アドボカシー（advokacy）」とは、ラテン語の“voco”に由来する言葉である。“voco”は英語で“to call”のことであり、「声を上げる」という意味である。「アドボカシー」とは、権利を侵害されている当事者のために「声をあげる」こと、すなわち「主張（弁護、支持）する」ことである。

2000西尾祐吾「アドボカシーの原理」より

2. 具体的な取り組みについて

(1) 計画訪問

大分県では、3年間 一時保護所、養護施設、里親家庭を訪問しています。

一時保護所訪問 … 週1回

養護施設訪問 …… 施設によって月1回または、2ヶ月に1回

里親家庭 …………… 随時

(2) アドボケイト活動への理解

上記のような計画訪問ができるようになるまでのプロセスは次のとおりです。

- ①大分大学権利擁護教育研究センター・大分県の連携の元、各組織との話し合いを重ねる。
- ②施設長訪問、職員説明と理解を得る。
- ③子どもへの「アドボケイトとは？」の制度説明を行う。
- ④面談希望者を募集し、面談を行う。

(3) 一時保護所の取り組み・面談時の工夫

- ◇県の調査員が、一時保護所を訪ね、子どもたちにアドボケイトの訪問を告げ、面談希望者を募る。グループ活動に参加したい子どもを先に面談するなど、子どもの活動希望を優先する。
- ◇控え室でスーパーバイザー（SV）、アドボケイト、県担当者、調査員で、面談者の順番、アドボケイトのペアを決め、面談室に移動し、子どもたちが話しやすい室内環境の構成をする。
- ◇配慮としては、座る位置や名前の呼び方などを子どもに決めてもらうこと、自分に選択肢があることを体験してもらうようにする。



こどものまなざし

このコーナーでは、今年度の人権作文集「ひかり」に掲載された作品を紹介していきます。子どもたちが日常の生活の中で考えたこと、感じたことなどにふれ、子どもたちの姿から学んでいきたいと思います。

自分の経験を通して思うこと（一部抜粋）

私は、3年生の時に、ちょっとしたいじめをうけました。そのとき、引っこしたばかりで相談できる友だちもいませんでした。

いつも仲良くしていた友だち3人が、急に態度が変わり始めて、「死ね」や「キモイ」などいわれるようになりました。

2学期に入ると、悪口を言ってきた中心の子が、私とその時仲が良かった子を見捨ててくられるようになりました。

5年の初め、いじめアンケートがありました。私は友だちも多くなり、毎日が楽しかったので、過去のことは書きませんでした。

ある日の昼休み、となりのクラスの先生に、私と他の友だち3人が呼ばれ、悪口を言ってきた子と話し合いをすることになりました。何を言われるかと思うと、過去に悪口を言ってきた子が、逆に私たちに無視されると書いていたのです。なぜか私たちが悪いのかのように話し合いが進められ、せつかくの話し合いの場で自分の気持ちを伝えることができませんでした。

「私は無視したつもりはなくて、あの子が急に無視するようになったと思っていたけど、あの子は逆だと思っていたのかな。」と頭が混乱していました。すると、その子が教室に来たので、私が、「私は無視したつもりなんかなかったけど、そう思うような態度をとってごめん。」とあやまると、「私こそ、あの時すごくいやなこととして本当にごめん。」とあやまってきました。長い時間がかかったけど、この時やっと仲直りができたと思います。

つらい経験をしたからこそ、いじめはなくなってほしいと思い、それと同時にそれでもいじめはなくなるんだと思いました。たとえ「ごめん」と仲直りしても、心についた傷は一生消えません。それは、いじめを受けた側もいじめをしてしまった側も同じことです。

人権作文集ひかり2022【第34集】

中津市 小学校六年 K・Yさんの作品より

K・Yさんは、他者への、そして、自分自身への豊かな想像力をもつ人ではないかと思いました。

「つらい経験」は、作者のK・Yさんに「いじめはなくなってほしい」という願いをもたせました。それと同時に「いじめはなくなる」という思いにもさせました。後者は、自分はそんなつもりがなくても、相手にとっては「いじめ」と、とらえられることがあるのだ、ということを経験したからでしょう。

自分がいじめや差別をしてしまう存在であることには気づきにくいものです。K・Yさんのように、人権感覚を磨き、いじめや差別を見抜けるようになりたい、と改めて思われる作品です。

わたしもクラスのなかまなの…？

新年度が始まって半年以上が過ぎました。年度当初に感じた子どもたちの課題、半年経ったからこそ確信した課題、子どもたちに関わる教職員を中心としながら子どもたちや家庭の願いが受けとられ続けていることと思います。

解決に向けての取り組みを始められているみなさんや、取り組んだものの更なる課題の連続に立ち止まって考えているみなさん…。

そんな今だからこそ、学年部や職員間で課題を整理し、子どもたちに対して何ができるのかを共通理解することも大切なのではないのでしょうか。

今回は、大分県教育センターの研修や各地区研究会の講演会や学習会にご参加いただいたこともある、鹿児島大学の肥後祥治さんにお話を伺いました。肥後さんは、ニュースじんけん147号でふれた「行動分析」を、子ども支援のツールとして使うことを提唱されており、みなさんの中にも研修を受けられた方が多いのではないのでしょうか。

肥後さんには、いくつかのヒントをいただくことができましたが、その中のひとつが「インシデントプロセス」と「行動分析」を併用することで、その子の周りのおとなが課題と今後の体制づくりの共有を図りやすいというものでした。特に、インシデントプロセスを教職員の協議の場を導入する際にいつも確認していることが右に示した3つの約束でした。



鹿児島大学 肥後祥治さん

「行動分析」と「インシデントプロセス」をあわせて進めていますよ。

特にインシデントプロセスの時には3つの約束をするんです。

- ①事例提供者のA先生の支援を考える
- ②専門知識のあるなしを問わずに発言する
- ③自分がA先生だったら実際にできるかどうかを考える

インシデントプロセス

実際に起こった出来事（インシデント）をもとに、事例提供者に質問しながら背景や原因となる情報を収集し、問題解決に向けて協議する。

行 動 分 析

周りのなかまが行う行動によって、気になる行動（問題行動）のあるBさんが、どのような行動をするのかを記録し続け、Bさんが気になる行動をとらないで生きていける環境をつくっていくアプローチ。

特に「行動分析」は、気になる行動（問題行動）があるBさんに対して、Bさん自身の行動を変えていくことで社会の中での生きづらさを取り除くことではなく、周りのなかまが変わることでBさんの生きづらさを無くしていきます。このことは、差別された人がいるのではなく、差別する人がいると認識して解消に向かおうとしている、部落差別解消の営みに似ていると思いませんか？

このヒントをもとにして、職員間で協議の場を持つ際にどのようなワークシートがあれば良いか考えてみました。県人教ホームページにWordデータを公開しますので、活用しやすければ使っていただき、活用したり、内容を改善して使うことができたりした実践があれば、是非お知らせください。

【県人教HP】 <http://kjoita.jp/>

行動分析に繋げる話し合い ワークシート

話し合いの進め方

- (1) ①②③を情報提供者が記入し、印刷して配付
- (2) ②③を情報提供者が説明し、質問を受ける
- (3) ④を共通理解し、⑤に対応策を各自で記入
- (4) ⑤を出し合い、⑥に進む

①情報提供者

②気になる行動

③気になった出来事とそこにつながる事実背景

ここまでは情報提供者が記入

④共通理解した問題点（もしくは事例提供者が子どもにのぞむ様子や姿）

⑤対応策を考えよう

- 大切にしたいこと
- ・事例提供者を支援する
- ・経験の有無や専門性にこだわらない
- ・事例提供者にできることか

⑥取り組んでみる支援

ねがひ



大分県人教 会長
後藤 哲郎

以下の思い出は、これまで数か所で同様の話をしたことがあるので、「あー、あの話か」と御笑覧ください。

私の初任校は大分市内の、一年がハクラス以上ある中学校で、一年生の学級を任されました。

天気予報で降雨が予想されると、多くの生徒が自宅から傘を持って登校し、靴箱横の傘立てに置くのですが、下校時に雨が降ると自分が持ってきた傘が紛失しているということが何度か起こりました。

自分のクラスでも同様のことがあったので、私は実態を把握しようと、この件に関しクラス全員の生徒に作文を書いてもらうことにしました。

多くの子どもたちが「こういったことは許せない」「自分も同じ目にあつたので、見張りをつけて犯人を捜してほしい」「傘を靴箱の横に置かず、教室に置けるように

してほしい」といった意見を書いている中で、一人の生徒の作文に私はハツとしました。

私も、最近傘を盗られました。その傘は、私が以前から欲しいと思っていた白い水玉模様の傘で、やっと自分好みのものを見つけ手に入れたものです。

下校時に傘が見当たらないので、入れ間違えたのではないかと全クラスの傘立てを探したけど見当たりませんでした。あきらめきれない私は、傘を持って帰った人が、また学校に持ってくるかもしれないと思い、雨の日は全校の傘立てを探し回りました。

何日か経ったある日、あるクラスの傘立てに私の傘を発見しました。「握り」の部分に記入していた私の名前はギザギザに削られていましたが、間違いなく私の傘でした。

しかし、私はその傘をそのまま

にしておきました。私がこれを持って帰ったら、この傘を持ってきた人が困るだろうし、また誰か他の人の傘が無くなるかもしれないと思ったからです。

このような内容だったと思います。私は自分が同じ立場であつても、到底このようなことは考えつかないと思います、その生徒に何か崇高なものを教えられた気がしました。

この件以来、「人の心の中は決して一時の判断や外見等では推し量ることができない。心の内側にある考えや思いを知ろうとする意識を大切に持ち続けなければならぬ」と思うようになりました。

なかなか、今でもできないことが多いのですが、これが私の「ねがい」です。



「私たちの力は微力ですが、無力ではありません」

今年度の九同教夏期講座。動画配信は、4本の特別講座を2本の現地アピールで構成されました。そのアピールのうちの1つが、「高校生1万人署名活動」のことを報告した高校生平和大使のみなさんでした。長崎では、1998年から高校生平和大使を国連に送る活動が始まりました。さらにその活動をきっかけに高校生1万人署名活動が始まり、今年で22年目を迎えています。今や19都道府県になかまが広がり、感染拡大状況から活動は困難となったものの、工夫を重ねながら集めた署名は200万筆を越えたそうです。「ビリョクだけどムリョクではない」と20年以上にわたって引き継がれてきたバトンを、これからであう方々にも届けたいというものでした。

「私ひとりだけでは…」と思う自分はいます。それでも長崎の高校生たちのように、「私からはじめる」と思えるよう、もう一度向き合いなおしたいと思えた2022年の夏でした。

こちら
編集部